

# 創世記22章における地名「モリヤ」の文学的機能

## Literary Functions of Place-Name “Moriah” in Genesis 22

岩寄 大悟  
Daigo Iwasaki

キーワード

読者、モリヤの地、アブラハム、エルサレム、歴代誌下3章

### KEY WORDS

Reader, the Land of Moriah, Abraham, Jerusalem, II Chronicles 3

### 要旨

創世記22章1－19節において、アブラハムは神から息子イサクを犠牲にささげるように命じられ、「モリヤの地」へと旅をする。このモリヤという地名は、創世記22：2以外では歴代誌下3：1に言及されるのみである。本稿では創世記22章の「モリヤ」が古代語訳においてどのように訳されているかを確認し、次にエルサレムと創世記22章の関係を、最後に地名モリヤが創世記22章においていかなる機能を有しているのかを検討する。モリヤは「見る」や「畏れる」との間に巧みな言葉遊びを形成しており、これらの重要な語句を統合させる機能を有している。さらに、創世記22章の記事を特別なものにする一方、物語において重要な場面設定であるモリヤの位置や意味が不明瞭で曖昧なため、結果的に物語の内容にも疑問を抱かせる機能を有している。このように、この物語においてモリヤは重要で多様な文学的機能を有しており、このモリヤという地名によって、現代の読者は創世記22章の読みに大きな影響を受けているのである。

### SUMMARY

In Genesis 22: 1-19, Abraham receives God's order to offer Isaac his son as a burnt-offering, and he thus goes on a journey to “the Land of Moriah.” Other than in

Genesis 22, this place-name “Moriah” is mentioned only in II Chronicles 3. This article observes how “Moriah” of Genesis 22 is translated in the ancient versions, and it finally examines the kind of function the place-name “Moriah” performs in the relationship between Jerusalem and Genesis 22. While “Moriah” forms a skillful wordplay between “to see” and “to fear,” it also has the function of uniting these important words. Furthermore, since the location and meaning of Moriah, though important for setting the scene, are ambiguous, it also has the function of making the reader question the contents of this episode. Therefore, in this narrative, the word is considered to have three literary functions: (1) it makes a wordplay, (2) it differentiates this story from other biblical passages, and (3) it makes the reader question the narrative. Consequently, this place-name Moriah exerts a rich influence on the present-day reader of Genesis 22.

## 0. はじめに

創世記22章1－19節（以下創世記22章）において、アブラハムは神から息子イサクを全焼の犠牲にささげるように命じられ、「モリヤの地」へと旅をする。この「モリヤ」という地名は、創世記22：2以外では歴代誌下3：1に言及されるのみである。しかも、創世記22章では「モリヤの地 (אֶרֶץ הַמּוֹרְיָה)」であり、歴代誌下3章では「モリヤ山 (הַר הַמּוֹרְיָה)」となっている<sup>1</sup>。創世記22章と歴代誌下3章の関係および歴代誌下3章が指し示すエルサレムと創世記22章の関係についてさまざまな見解が出されてきた。また、創世記22章のモリヤを後代の変更と見做し、モリヤという地名の元来のテキストを探る研究も多くなされてきた。たとえば、「近代聖書学の父」とされる J. Wellhausen はシリア語訳・ペシッタに従って「アモリ人の土地」であると考えた<sup>2</sup>。また、H. Gunkel は創世記22章が元来「エルエル (J<sup>e</sup>ru'el)」の聖所原因譚であったと主張した<sup>3</sup>。O. Procksch は本来「モレの榿の木」であると述べている<sup>4</sup>。M. Dahood はカナンの史料をもとにモリヤを「私の教師はヤー」だと解釈している<sup>5</sup>。

ここで概観したように、創世記22章の地名モリヤについて、元来のテキストおよびモリヤの意味をめぐるさまざまな研究がなされてきた。本稿では、まず創世記22章の「モリヤ」が古代語訳においてどのような訳語が採用されているのかを確認し、次にエルサレムと創世記22章の関係を、最後にモリヤという地名が創世記22章においてどのような機能を有しているのかを検討する。そして、これらの考察をもとに、創世記22章において地名モリヤが物語において極めて多様でかつ重要な文学的機能を有して

いることを明らかにしたい。

## 1. 古代語訳

まず、創世記22章のモリヤについて、サマリア五書を含む主要な古代語訳において、どのような訳語が採用されているのか、比較・検討を行っていきたい<sup>6</sup>。この作業により、サマリア五書をのぞく各々の翻訳において、創世記22章のモリヤがどのように理解・解釈され、他の言語に置き換えられたのかを考察することができ、また、サマリア五書についても同時に検討することで、ヘブライ語本文の異なる読みの可能性についても探ることが可能である。つまり、主要な古代語訳の検討から、「モリヤ」をめぐる理解の多様性を知ることができる。

マソラ本文および、主要な古代語訳における創世記22章の「モリヤ」の訳語の音写とその意味を一覧にすると以下の通りである<sup>7</sup>。

名称（言語）	音写	意味
マソラ本文（ヘブライ語）	hammôrîyāh	モリヤ
サマリア五書（ヘブライ語）	hmwr'h	モリア／見ること
七十人訳（ギリシア語）	tēn hypselēn	高い <sup>8</sup>
アキイラ訳（ギリシア語）	tēs optasias	明らかに見える
シュンマコス訳（ギリシア語）	tēs kataphanē	顕現の／幻の
ウルガタ（ラテン語）	Visionis	顕現の／幻の
タルグム・オンケロス（アラム語）	pūlhānā	礼拝の
断片タルグム（アラム語）	mwryh	モリヤ（山）
タルグム・ネオフィティ（アラム語）	mwryh	モリヤ（山）
タルグム・偽ヨナタン（アラム語）	pwlhñ'	礼拝の
ペシッタ（シリア語）	'mwrj'	アモリ人の

この一覧から明らかなように、モリヤという地名について、多くの古代語訳では音写するのではなく、多様な訳語が採用されている。サマリア教団が保持しているヘブライ語本文（サマリア五書）では、マソラ本文から①𐤌と𐤅の間に𐤓が加えられていること、②𐤅と𐤇の間の𐤓が𐤕に変更されている、という二点で異なっている<sup>9</sup>。これはマソラ本文のテキストとは異なる綴りを保持していると考えられるが、同時に動詞「見る」(√ראה) の分詞形であるとも解することができる。また、断片タルグムとタルグム・ネオフィティが音写を採用しているが、「モリヤの地」を「モリヤ山」と変更し

ているため、歴代誌下3章のエルサレム神殿の場所と同定したと考えられる。このように、創世記22章において「モリヤ」をそのまま音写する古代語訳はきわめて少なく、類似のテキストを保持する場合でも綴りが異なったり（サマリア五書）、「地」が「山」へと変更されたりしている（断片タルグム、タルグム・ネオフィティ）。このようなことを総合的に考えれば、一部のタルグムを除く多くの古代語訳では、モリヤを地名としてではなく、固有名詞ではない一般の単語として翻訳したと考える方がより適切であろう<sup>10</sup>。そして、これらの古代語訳のうち、サマリア五書（意識だと考える場合）、ウルガタ、アクィラ、シュンマコスの諸訳はモリヤを「見る」（ $\sqrt{\text{ראה}}$ ）として解釈しているようであり<sup>11</sup>、タルグムのうち、オンケロスと偽ヨナタンは「畏れる」（ $\sqrt{\text{ירא}}$ ）をもとに訳していると考えられる<sup>12</sup>。

以上みてきたように、「モリヤ」は多くの古代語訳では固有名詞ではなく一般の単語として解釈されていた。また、現在のテキストでは、定冠詞が付いている。ヘブライ語聖書において、地名に定冠詞を有するものは「ヨルダン川（ $\sqrt{\text{הַיַּרְדֵּן}}$ ）」などごくわずかな例である<sup>13</sup>。さらに、創世記22章と同様に「モリヤ」という地名が登場する歴代誌下3章の古代語訳においては、創世記22章の同一の訳語を採用するものはない<sup>14</sup>。つまり、創世記22章の古代語訳の理解では、ヘブライ語聖書の原文が示す「モリヤ」という地名は、固有名詞ではなく土地を示す名詞ないし修飾語であると考えられる。

## 2. エルサレムとの関係について

上述のように、「モリヤ」が再び登場するのは歴代誌下3：1のみである。この歴代誌の記述では、ソロモンが神殿を建てた場所であり、以前ダビデにヤハウェが顕れたところである。このため、創世記22章の地名モリヤがエルサレムと同定されるのかについて、長らく関心が払われてきた。エルサレムとの同定には研究者でも意見が分かれている。ここでは、モリヤをエルサレムと同一視する見解および同一視できないとする見解について、順に検討していきたい。

### 2-1. モリヤをエルサレムと同一視する研究

紀元後1世紀のギリシア語著作家ヨセフスをはじめとするユダヤ教の解釈では、創世記22章の「モリヤ」をエルサレムと同一視することがなされてきた<sup>15</sup>。このような見解は、中世のユダヤ教の代表的な聖書注解者の一人で、後代のユダヤ教の聖書解釈にも多大な影響を及ぼしたラシ（ラビ・シュロモ・ベン・イツハキ）も同様である。彼は「モリヤ」について「エルサレムのこと」としている<sup>16</sup>。さらに、ラムバン（モーゼス・ナフマニデス）は、ラシによる創世記22章の注解やタルグム・オンケロ

ス、創世記ラッバーなどを引用しつつ、「《モリヤの山》は神殿の山のみ呼ばれる名前のように思われる。多分、モリヤにあるその土地の中に山があり、その山の名前にちなんで町は呼ばれている」と主張している<sup>17</sup>。このように、ユダヤ教においては、創世記22章のモリヤをエルサレムと同一視する解釈もなされてきた。

G.Vermes や B.Chilton など、現代の研究者の中にも、創世記22章の地名を言及する際に、「モリヤ山 (Mt. Moriah)」とする者も存在する<sup>18</sup>。つまり、彼らは創世記22章の「モリヤの地」と歴代誌下3章の「モリヤ山」を同一視しており、創世記22章をエルサレムだと考えているのであろう<sup>19</sup>。

また、B. ヴォーターはこのモリヤという地名を「後に、歴下3:1と一致させるために、一書記によって訂正されたのであろう」としている<sup>20</sup>。つまり、彼はモリヤという現在のテキストでは創世記22章と歴代誌下3章とは一致すると考えているのである。さらにフォン・ラートは「おそらく『モリヤ』という地名は、この物語に古いエルサレムの伝統の口実を与えるために、歴代誌下三章一節の方から二次的にわれわれの物語に入れられたのであろう」と述べている<sup>21</sup>。

このように、創世記22章の記事を歴代誌下3章の記事およびエルサレムと同一視する見解も存在するが、それらはユダヤ教の解釈者たち（ヨセフス、ラシ、ラムバン）、創世記22章と歴代誌下3章の「モリヤ」を同一視するもの（Vermes、Chilton）、さらには「モリヤ」を後代の二次的付加だと考えエルサレムと同定するために変更されたとするもの（ヴォーター、フォン・ラート）であった。

## 2-2. モリヤとエルサレムを同一視できないとする研究

次に両者を同一視できないとする研究を見ていきたい。ヘブライ語聖書学を専門とする多くの研究者がこの見解をとっている<sup>22</sup>。ここでは創世記22章のテキストからの情報と、研究者の見解について確認しておきたい。

まず、創世記22章のテキストから得られる「モリヤ」についての情報は、①ベエル・シェバから三日間の距離である、②アブラハムがヤハウエ・イルエと名付けた、③今日でも「ヤハウエの山に、イエラエ」と言われている、という三つの情報だけであり、しかもこれらの情報はいずれも不確かなものである<sup>23</sup>。つまり、これらの情報からは地理的位置を決定することは不可能である。

次に、現代の研究者の議論を検討したい。V.Hamilton が指摘する通り、歴代誌下3章ではアブラハムではなくダビデへの神顕現が語られるのみで、創世記22章の出来事については語られていない<sup>24</sup>。また、R. デヴィッドソンは「もはや後代の信仰の産物以外のものではない」と述べ、「この物語の書かれた時代にすでにエルサレムだと考えられていたとするならば、テキストにはその事実を表わすいくつかの痕跡が残ったは

ずだから」だと指摘する<sup>25</sup>。さらには、そもそも「神殿の丘 (the temple hill)」のことを本当に「モリヤ (the Moriah)」と呼んでいたのかどうかについても確かではない<sup>26</sup>。

このように、創世記22章にエルサレムについての言及がなく、歴代誌下3章にもアブラハムについての言及がないため、両者の依存関係は極めて不明確である。さらに、モリヤという場所の地理的位置も不確かなまとなっている。

## 2-3. 小括

以上、創世記22章のモリヤを歴代誌下3章との関連からエルサレムと同定することについて検討した。聖書学者の多くが両者を同一視できないと判断していた。しかしながら、モリヤという地名がヘブライ語聖書に二度しか登場せず、両者から提供される情報もあまりにも少ないため、創世記22章と歴代誌下3章の両者における「モリヤ」がいかなる関係にあるのかは明らかではなく、また、一方が他方に依拠するのか、あるいはまったく別の伝承を受け継いでいるのかなどについては推測の域を出ない。そのため、創世記22章のモリヤという地名が歴代誌下3章のモリヤと同一の場所であるかや、歴代誌下3章で示唆されているエルサレムと創世記22章とが関連するのかということについて、多くの困難に直面せざるをえず、その結果、「モリヤ」という地名の位置も結局不明瞭なものにとどまるのである。

## 3. 文学的機能

ここで、創世記22章における「モリヤ」の文学的機能について検討していきたい。すでに本稿の冒頭で確認した創世記22章の「モリヤ」の元来のテキストを探る議論のほか、モリヤを語源的に解明しようとする研究も少なくない。たとえば、 $\sqrt{\text{ראה}}$ の「見る」(8、14節など)という語を語源とする説や、 $\sqrt{\text{ירא}}$ の「畏れる」(12節)という語から説明を行う説がしばしば主張されるが<sup>27</sup>、ヘブライ語の語形変化では「モリヤ」からこれらの説明を行うことは困難である<sup>28</sup>。しかしながら、この両者の語と「モリヤ」の間に、発音上の類似や言葉遊び、語呂合わせがあることについては認めることができるだろう<sup>29</sup>。しかも、この発音上の類似と言葉遊びは創世記22章において特に重要な役割を果たす二つの語「見る ( $\sqrt{\text{ראה}}$ )」と「畏れる ( $\sqrt{\text{ירא}}$ )」の間で存在する<sup>30</sup>。さらに、この両者の語はテキストにおいて混乱／混同をなしていた<sup>31</sup>。つまり、混同され、もしくは、混乱した類音の二つの動詞 $\sqrt{\text{ראה}}$ と $\sqrt{\text{ירא}}$ が重要な役割を果たす創世記22章の物語において、その場所を「モリヤ」とすることによってこの両者を統合する機能を有している。



では、現代の読者にとってはいかなる文学的機能を有しているだろうか？ 物語において、アブラハムは神から「モリヤの地」と指示されたとき（2節）、いかなる質問もしておらず、翌朝の準備でも三日の旅路でも目的地については十分認識しているようである。つまり、場所を指定した神と指定されたアブラハムの両者にとっては、この地名は自明の場所であるといえるだろう。しかしながら、現代の読者には、2. で行なったエルサレムと創世記22章との関連についての考察からも明かなように、このモリヤという地名の位置がまったく定かではない。この創世記22章の場面はアブラハム物語（創世記12-25章）において神／ヤハウエとアブラハムの間に最後に対話がなされる場面であり、かつ、これまで語られてきたアブラハムへの祝福が再確認される場面である（16-18節）。そのため、創世記22章はアブラハムの生涯において最も重要な事件だと考えられてきた<sup>32</sup>。しかしながら、その重大な場面の位置が全く不明になることで、一方では他の聖書の物語では用いられない特別な場所でなされた物語として、創世記22章の特別性を強調することになる。

しかし、他方、創世記22章のモリヤの位置・意味の不明瞭さ<sup>33</sup>と古代語訳における理解の多様性、さらには歴代誌下3章やエルサレムとの関係の曖昧さと不明瞭さが、このモリヤなる地名を虚構のものだとも感じさせる<sup>34</sup>。「その実際の場所が非常に曖昧であることは、とりわけそれがアブラハムの人生の鍵となる事件に起源があると主張される場合、奇妙である<sup>35</sup>」とデヴィッドソンが指摘しているように、重要な記事であるはずの創世記22章の場所が曖昧であることはきわめて奇妙なことだといえる。この奇妙さが、創世記22章の内容に疑問を抱かせ、創世記22章に語られる神ヤハウエによるアブラハムの祝福をも疑わせる機能をも含んでいる。さらに、これまでアブラハムに語られてきた祝福に疑問を持たせることで、これまで神ヤハウエとアブラハムを主たる主人公として語られてきたアブラハム物語を再考させ、読者に再度読み返させる機能をも有しているのだ。

このように、創世記22章において地名モリヤは、きわめて技巧的な語呂合わせを形成し、しかもそれによって創世記22章の「見る (רָאָה)」と「畏れる (יָרָא)」という混乱／混同をまとめる機能を有している。さらに、アブラハムの生涯においてきわめて重要な物語を特別な場所で行われたとして創世記22章の記事を特別視させる一方で、この「モリヤ」という地名の意味がまったく不確かであり、場所も不明であるので、全く虚構の地名だとも考えさせ、さらには創世記22章の物語の内容を疑わせると同時に、これまで語られてきたアブラハム物語について再考を促し、読者に再度物語全体を読み返させるという、文学的機能を有しているのである。

そして、この「モリヤ」という地名によって、創世記22章の記事を特別視させると同時に、創世記22章の内容を疑わせ、さらにはアブラハム物語についても再考を促す

ことが、アブラハム物語において語られるアブラハムへの祝福と子孫への約束という神学的意義にも疑問を抱かせることになるのである。

#### 4. まとめ

以上、創世記22章に登場する地名「モリヤ」について、文学的機能について考察してきた。まず1. では、主要な古代語訳を検討し、それらのほとんどが「モリヤ」を音写ではなく、意識を行っていることを確認した。そして、このような意識がされる場合、「モリヤ」が固有名詞としてではなく、一般の単語として解釈されており、多様な理解を示していることを確認した。次に、2. ではエルサレムと「モリヤ」の関係について、検討を行った。これについては、モリヤを同一視できるとする見解（2-1）とできないとする見解（2-2）を検討した。そして、モリヤという地名が聖書に二度しか登場せず、両者から得られる情報も少ないため、両者の関係については推測の域を出ないことを確認し、その結果、モリヤという地名の位置も不明瞭なものとなることを論じた。最後に3. で、これらの議論をふまえて、創世記22章における文学的機能について考察を行なった。これまでの研究者たちが語源的にモリヤを解明しようとしてきたが、それらの試みは文法的・言語学的には困難であった。しかしながら、しばしば語源的な説明として示される創世記22章において重要な動詞である「見る（ $\sqrt{\text{ראה}}$ ）」や「畏れる（ $\sqrt{\text{ירא}}$ ）」とモリヤとの間に、発音上の類似が存在し、それらが巧みな言葉遊びを形成していた。その結果、創世記22章の重要な語句を統合させる機能を有していた。

また、物語を特別な場所で行われたものにするすることで、創世記22章の記事の特別性を強調することになる。しかし他方、創世記22章において重要な場面設定であるはずのモリヤの位置や意味が不明瞭で曖昧なため、結果的に創世記22章の物語の内容にも疑問を抱かせ、さらに創世記22章で語られる神ヤハウエによるアブラハムへの祝福をも疑わせる機能も有している。さらに、アブラハム物語における創世記22章の重要性を勘案すれば、創世記22章のモリヤの曖昧さがアブラハム物語全体を再考させ、アブラハム物語を冒頭から読み返させるように読者を誘う機能をも有している。そして、このような「モリヤ」が有する機能は、文学的なものにとどまらず、神学的にもアブラハム物語の意味を再度考えさせるという意義を持っている。

このように、創世記22章において地名モリヤはきわめて重要で多様な文学的機能を有しており、現代の読者はこの地名「モリヤ」によって、単なる場面設定や位置の確定に留まらない大きな影響を、創世記22章の読み自体に受けているのである。

本稿で論じてきたような意味の不明瞭さや曖昧さは、創世記22章の「モリヤ」に限



らず、ヘブライ語聖書の他の物語部分にもしばしば見られるものであると思われる。今後それらについても文学的機能の観点から文学的・文芸批評的に考察することで、これまであまり顧みられることの少なかったヘブライ語聖書の有する不明瞭さや曖昧さが読みに与える影響について、明らかにすることが可能になると考えられる。

#### (付記)

本稿は2012年9月に伊勢・皇學館大学で行われた日本宗教学会第71回学術大会において、行った発表に加筆・修正を行ったものである。発表時に有益な質問やコメントをくださった諸先生方に深く感謝する。また、査読者の先生方から多くの有意義な指摘を受けた。記して感謝したい。

#### 注

- 1 創世記22章と歴代誌下3章でのモリヤの綴りの違いは、正書法の違いによると考えられる。フォン・ラートも両者の綴りの違いについて「多少の正書法上の違いはあるが」と述べている（ゲルハルト・フォン・ラート『創世記（ATD 旧約聖書註解1）』（山我哲雄訳）、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993年、425頁）。
- 2 J. Wellhausen, *Die Composition des Hexateuchs und der Historischen Bücher des Alten Testaments*. 4. unveränderte Auflage, Berlin: Walter de Gruyter & Co, 1963, S. 19. 松田明三郎「創世記」、手塚儀一郎＋浅野順一＋左近義慈ほか編『口語 旧約聖書略解』、日本基督教団出版部、1957年、38頁も併せて参照。Skinner もオリジナルの名称を復元するなら「もっともシンプルなものがアモリ人の土地である」と述べている（John Skinner, *A Critical and Exegetical Commentary on Genesis* (ICC). 2<sup>nd</sup> ed., Edinburgh: T&T Clark, 1930, p. 329）。また、B. ヴォーターは「本来の文は『アモリ人の地』となっていたのであろう」（B. ヴォーター、「創世記」（浜寛五郎訳）、A. ジンマーマン編『カトリック聖書新注解』、エンデルレ書店、2版、1980年、224頁）とし、フォン・ラートは「後に入れ替えられた古い地名が、旧約聖書のシリア語訳に保存されているのかもしれない。そこでは『モリヤ』の代わりに『アモリ人〔の地〕』と書かれている」と主張している（フォン・ラート、前掲書、426頁）。さらにC. Westermann もこの見解を「あり得ること」としている（Claus Westermann, *Genesis 12-36* (BKAT I/2). 2. Auflage, Neukirchen-Vluyn: Neukirchen Verlag, 1989, S. 437）。
- 3 Hermann Gunkel, *Genesis* (HK). 5. unveränderte Auflage, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 1922, S. 241. G. Sauer & 守屋彰夫「モリヤ」、旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』、教文館、1989年、1195頁も参照。
- 4 Otto Procksch, *Die Genesis* (KAT). 3. Auflage, Leipzig: Deichertsche Verlagsbuchhandlung Werner Schol, 1924, S. 315. 松田、前掲書、38頁も参照。

- 5 Dahood はカナン語「私の教師は声 (*mu-ri-gû<sup>ki</sup>*)」からの類推で、モリヤについてこのような意味だとする解釈を示している (Mitchell Dahood, “The God Yā at Ebla?,” 1981, *JBL* 100(4): 608, n. 6)。Mitchell Dahood, “Eblaite and Biblical Hebrew,” 1982, *CBQ* 44(1): 16も併せて参照。この場合「ヤー」はヤハウエの短縮形だと考えられる。
- 6 サマリア五書を含む古代語訳の成立経緯、年代および場所についても、これまで長らく詳細な議論がなされてきているが、ここで古代語訳を比較・検討するのは創世記22章における「モリヤ」の文学的機能について考察するためであり、成立をめぐる詳細な議論については本稿の範囲を大きく超えているため割愛したい。
- 7 以下の古代語訳については、BHS のクリティカル・アパレイタスのほか、以下の諸文献を参照した。関根清三「創世記二二章1－19節 翻訳と本文批評」、関根清三編『アブラハムのイサク献供物語—アケーダー・アンソロジー』、日本キリスト教団出版局、2012年、18頁および西村俊昭「創世記二二章——九節」、『旧約聖書の予言と知恵』、創文社、1981年、259頁、Nahum M. Sarna, *Genesis* (JPS Torah Commentary). Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1989, p. 391。
- 8 七十人訳は創12:6のモレの榎の木でも同じ訳を採用している (E. A. Speiser, *Genesis: A New Translation with Introduction and Commentary* (AB1). Garden City: Doubleday and Company, 1964, p. 163)。
- 9 ただ、前者は正書法の違いだと考えられる。マソラ本文の代下3:1を参照。
- 10 Kenneth A. Mathews, *Genesis 11:27-50:26* (NAC). Nashville: Broadman & Holman Publishers, 2005, p. 291。
- 11 C. T. Hayward はアクィラ訳は 'or に基づく訳だと主張している (C. T. Hayward, “Commentary,” in: St. Jerome, *Saint Jerome's Hebrew Questions on Genesis*. tr. with Introduction by C. T. R. Hayward, Oxford: Clarendon Press, 1995, p. 177)。
- 12 Bruce K. Waltke, *Genesis: A Commentary*. Grand Rapids: Zondervan, 2001, p. 305。
- 13 Mathews も地名が定冠詞を伴うことは珍しい (uncommon) と指摘している (Mathews, *op. cit.* p. 291)。
- 14 七十人訳では ton Amorea、ルキアノスの校訂では tō Amoria、ウルガタでは Moria となっている (S. R. Driver, “Art. Moriah,” in: James Hasting (ed.), *A Dictionary of Bible*. Vol. 2, New York: Charles Scribner's Sons, 1900, p.437)。
- 15 ヨセフス『ユダヤ古代誌』I: 223 (フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌 I－II』(秦剛平訳)、山本書店、1982年、91頁)。
- 16 ラッシー「ラッシー『創世記注解』(手島勲矢訳)、関根清三編『アブラハムのイサク献供物語—アケーダー・アンソロジー』、日本キリスト教団出版局、2012年、59頁。
- 17 モーゼス・ナフマニデス「モーゼス・ナフマニデス『創世記注解』(手島勲矢訳)、関根清三編『アブラハムのイサク献供物語—アケーダー・アンソロジー』、日本キリスト教団出版局、2012年、70頁。

- 18 Geza Vermes, "Redemption and Genesis XXII," in: idem, *Scripture and Tradition in Judaism* (StPB 4). Leiden: E. J. Brill, 1961, p. 193および、Bruce Chilton, "The Hungry Knife: Towards a Sense of Sacrifice," in: M. Daniel Carroll R., David J. A. Clines and Philip R. Davies (eds.), *The Bible in Human Society: Essays in Honour of John Rongerson* (JSOTSup. 200). Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995, p. 122。
- 19 この見解に近い研究者として M. ノートは「歴代志史家は、彼の用いた底本の記述を越えて、歴代志下三章一節で、神殿の場所が伝承上のテキストの創世記二二章二節における『モリヤの山』であることを付け加えている。これは、歴代志史家の時代にしばしば行われていた連想であろう」と述べて、歴代誌の記者は「モリヤの地」と「モリヤ山」を混同していたことを示唆する（ノート、前掲書、347頁、注15）。
- 20 ヴォーター、前掲書、224頁。
- 21 フォン・ラート、前掲書、425-426頁。
- 22 たとえば、Arnold は「聖書において唯一モリヤについての他の例はエルサレムであり、そこにソロモンが神殿を建てた」と述べつつも、「われわれはこれがアブラハムのモリヤと同一の場所だとみなす理由はない」と主張している (Bill T. Arnold, *Genesis* (New Cambridge Bible Commentary). Cambridge: Cambridge University Press, 2009, p. 204)。
- 23 ①の情報の不確かさについて、ノートは、創世記22章の場所として E がモリヤの地にある「ヤハウエ・エレ」の山を選んでいとし、これが「ベエルシバから三日の距離にあるといわれる」が、「それ自体まったく曖昧で」「何も言っていないに等しい」と指摘し、その理由として「ベエルシバからどちらの方角に行くのか述べられていない」ことをあげる。そして、この地名について「これ以上詮索してもあまり骨折りがいがない」と述べている（ノート、前掲書、175頁）。さらに、②と③については、ヘブライ語聖書の他の記事にこの「諺」ないし「慣用句」と思われる句が登場しないため、実際にこのような言葉が当時言われていたのか否かについては疑問の余地がある。
- 24 Victor P. Hamilton, *The Book of Genesis: Chapters 18-50* (NICOT). Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 1995, p. 102。また、Davila は歴代誌の記述のモリヤ山の言及では、ソロモンとダビデを結び付けているだけだと述べている (James R. Davila, "Art. Moriah (Place)," in: *ABD*. 1992, IV: 905)。さらに Mathews も歴代誌がアブラハムの出来事を言及しないことを指摘している (Mathews, *op. cit.* p. 290)。
- 25 R. デヴィッドソン『創世記（ケンブリッジ旧約聖書注解）』（大野恵正訳）、新教出版社、1986年、182頁。
- 26 W. H. Bennett, *Genesis* (The Century Bible). Edinburgh: T&T Clark, 1904, p. 238.
- 27 たとえば、Keil & Delitzsch は  $\sqrt{\text{ראה}}$  のホファル形の分詞にヤハウエの短縮形ヤーが付けられた形であるとし、意味を「ヤハウエが見られること」つまり「ヤハウエの顕現」とであるとする (C. F. Keil & F. Delitzsch, *Biblical Commentary on the Old Testament Vol. I, Pentateuch*. Grand Rapids: WM. B.

- Eerdmans Publishing Company, 1959, p. 249)。同様に $\sqrt{\text{ראה}}$ から説明する説を採用する研究者は Mathews などがある。この場合、14節のアブラハムによる地名の命名と関連させている (Mathews, *op. cit.* p. 291)。他方、W. S. Towner はこの両者に加え、 $\sqrt{\text{ירה}}$  (「教える」) という語からも導けると主張している (W. Sibley Towner, *Genesis* (Westminster Bible Commentary). Louisville: Westminster John Knox Press, 2001, p. 187)。
- 28 たとえば、「見る」という動詞 $\sqrt{\text{ראה}}$ から導かれたと考える場合、ヘブライ語の語形変化では消えない $\text{א}$ がモリヤの綴りに存在しないため、「見る」を語源と考えるのは文法的に不可能である。S. R. Driver も同様にこれらの語源的解釈が不可能であることを指摘している (S. R. Driver, “Art. Moriah,” in: James Hasting (ed.), *A Dictionary of Bible*. Vol. 2, New York: Charles Scribner’s Sons, 1900, p. 437および S. R. Driver, *The Book of Genesis*. 6<sup>th</sup> ed., London: Methuen & Co, 1907, p. 217)。
- 29 たとえば次の文献がモリヤと $\sqrt{\text{ראה}}$ の間における発音上の類似を指摘している。Mathews, *op. cit.* p. 291および、Robert Alter, *Genesis: Translation and Commentary*. New York: Norton & Company, 1996, p. 104。また、Towner, *op. cit.* p. 188では $\sqrt{\text{ראה}}$ と $\sqrt{\text{ירא}}$ の間に発音上の類似を指摘している。
- 30 アブラハムの判断では神は「見る／備える」ものであり、使いの判断ではアブラハムは神を「恐れる」ものである (Hamilton, *op. cit.* p. 113)。
- 31 水野隆一『アブラハム物語を読む—文芸批評的アプローチ (関西学院大学研究叢書115編)』、新教出版社、2006年、351–352頁。
- 32 たとえば次の研究者が、創世記22章をアブラハムの生涯における最も重大な事件だと述べている。S. R. Driver, *The Book of Genesis*. p. 216や Sarna, *op. cit.* p. 150。
- 33 西村俊昭も「この物語の元来の場所がどこであるのか不明」だと指摘している (西村、前掲書、259頁)。
- 34 B.J.Diebner はモリヤを「おそらくフィクションの名前」だと述べている (Bernd Jørg Diebner, “Art. Moriah,” in: *RPP*. 2010, VIII: 533)。
- 35 デヴィッドソン、前掲書、182頁。